六　『川崎幾三郎翁傳』より

第十六　幾三郎翁と秀才教育土佐中學校

一、川崎翁は秀才教育の實行者

槍持槍使はず、金持金使はずの諺通り、たまる程汚くなるが俗人の常だが、川崎翁は全く此の反對だつた。翁がよく集め、よく散じた事は、前章翁の社會事業の條下に縷述した通り、翁の一代に關與した社會公共事業と其の爲に散じた金額は、恐らく縣下全富豪の筆頭であらう。イヤそれよりも翁一流の陰徳がどの位あつたか分らぬ。系圖を審べねば分らぬやうな遠縁の者が困つてをると聞いては、扶持米をやるし、大火の時には一般の見舞金以外、顔見知り位の罹災者へも屹度金一封を贈つてゐる。かうした陰徳は義理や名譽心でやれるものではない。矢張り之は翁の天生の仁愛の精神から出たもので、川崎一門のお家流とも云へる。

要するに川崎翁の寄附救恤の動機は、富を以て屋を潤し、依怙の縁者を潤したのみならず、廣く社會一般を潤さんとしたのだ。しかも名聞(めうもん)嫌ひの翁は、晴れがましい寄附は他動的に金は出すが、それよりも隠れた所で、神と偕(とも)に陰徳を積む事に專念した。ツマリ川崎翁の寄附の場合も、その事業と同様、殆ど他動的で、云はゞ据膳を食つたに過ぎぬ。

土佐中の寄附は翁の生前死後を通じて、總計五十万圓を出してをる。此の巨費を投じた育英の大事業も、翁の諸他の寄附と同じく、全く他動的だつた。之は川崎翁のみではない。盟友宇田氏も「宇田友四郎翁」の傳ふるが如く、此の寄附ばかりは藤崎市長の發案であつて、宇田氏は欣然之に應じはしたが、要するに受身の寄附たる事は川崎翁と同一であつた。

「土佐中」成立に至るまでの經過は、宇田傳に委曲をつくしてをるから、茲には重複を避けるが、只一つ此寄附に對する川崎翁の立場だけは詳細説明の必要がある。

一體「土佐中」の秀才教育なるものを、誰が最初に案出し、その案が又誰の口から川崎翁の耳に入つたか、そんな詮索は扨ておいて、此の秀才教育といふ事と川崎翁の精神なり閲歴とどういふ關係があつたかゞ問題である。若し夫れ川崎翁の寄附が、單に寄附のための寄附であつて、育英事業、殊に秀才教育に對して何の理解も同情もなく、只だ親友の勸めだから寄附すると云ふ程度のものだつたら、川崎翁の五十万圓の寄附も、それは單に凡庸の出資者といふだけで、精神的意義の大半を喪(うし)なふ結果になるが、然し今飜つて翁一代の業績より觀察する時、翁は壯年時代より育英事業に對して深き理解あり、加之(しかも)秀才教育は十数年に亘つて、翁自ら之を實行してゐたのだ。それなら何故翁自ら之を唱道しなかつたかと云ふ事は、夫れは翁の平生のやり口でも分る通り、万事表面に立つを厭がる翁としては、決して無理のない所で、翁は心中秘かに秀才教育の機の熟して、識者の主唱するのを待つてゐたのに相違ない。だから形式からみる限り、

之はもとより他動的に相違はないが、翁の如く秀才教育に理解あり、而して之に對する精神的準備の完成し、しかも之を助長するに必要なる一切の條件と資格とを具備せる翁の如きは、世上往々見うけるところの無理解の出過ぎ者に比して、勝ること實に万々、その人格の差たる宵壌も啻ならずである。

二、川崎翁の家庭教育

川崎翁は明治二十年台から、晩年に至るまで、教育事業に關する寄附は、實に枚擧に遑ないが、然し之は翁だけの自慢にはならぬ。只一つ翁が自ら幼稚園を開設し、自らその園長となり、本縣に於ける私立幼稚園の始祖となつた事は、川崎翁が財界に對すると共に、教育界に封して深き理解のあつた證據である。

更に又内輪の人の話を聞いても、川崎翁が廣義の教育事業について、如何に甚深の興味を持つてゐたかが分る。今左に二三の實例を擧げてみやう。

川崎翁は三代幾三郎氏即ち養嗣子庄太郎君の幼年時代など、實に嚴格に躾けたもので、富豪の子として甘やかしては碌なものにならぬと云ふので、賢夫人と共に川崎のお家風のスパルタ式硬教育を施した。例へば小遣の如きも、一日分何錢と定めて、しかも夫れは翁が特に土佐銀行から持ち歸つた五厘錢で、翁の手づから渡したさうだが、かうした教育

上の苦心は報はれて、その結果は大川崎翁の後繼者としての故三代幾三郎氏は、あの通り忠直謹嚴な、云はば川崎家の型にはまり切つた立派な人格者にまで育つたのだ。

川崎翁はあの位徹底した理財家で、必要な金は万金も惜まぬ代り、何によらず無駄使ひを戒めた。そして家庭教育に於て自ら其の範を示した。その一例として翁の小遣帳など全部薄手の眞草紙だつたが、夫れへ先づ薄黒で書く、その上へヤゝ濃く書く、三度目には裏返して使ふ、そして愈よ用濟になると、キレイに截つてコヨリに捻つた。此の仕事は少年時代の富三郎氏に命ぜられたが、何しろこのコヨリ捩りは十年一日の如く、毎晩の行事なので、終には富三郎氏はコヨリ捩りの名人といふ隠し藝が出来る程に上達したさうだ。こんな工合に何不自由のない豪門の子弟に、身を以て節約の範を示し、實物教育を授けたところに、川崎翁の徹底した教育方針が伺はれる。

之も同じ勤倹教育の實例だが、乗出邸が新築中の大正三四年頃、川崎翁は毎朝土銀出勤の次手に、北奉公人町の自邸から、必ず普請場へ途寄りした。或朝の事、翁が普請場を見廻つてをる時、庭の松の木へ括りつけてある一匹の小犬を見付けた。翁は傍に居た監督の熊澤清馬君に、此の犬はどうしたものかとたづねた。熊澤君は夫れは私が大工に貰つたもので、内で飼ふつもりですと答へると、翁は例の砕けた調子で、

「さうかよ、犬もエゝが犬は卵を産まんぜよ。鶏を飼ふて卵を取つた方がようはないかよ。私なら鶏を飼ふが。」

翁の言葉は短いが意味は深長だ。熊澤君は成程と反省して、犬は即日大工へ戻し、その代りの養鶏を始めた。そして

此の日から同君は飯より好きな犬道樂はサツパり止めてしまつた。

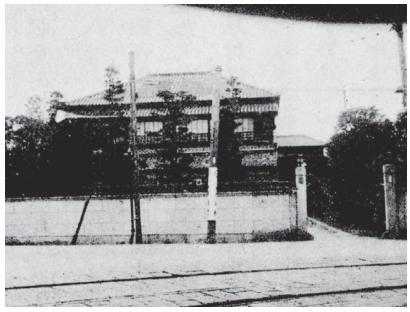
三、得月樓は秀才の掘り出し場

川崎翁に限らず、明治三四十年頃の名士連は、得月や鏡水樓を倶樂部代りに、よく出入りしたものだが、川崎翁のためには、得月樓は秀才の掘り出し場になつてゐた。

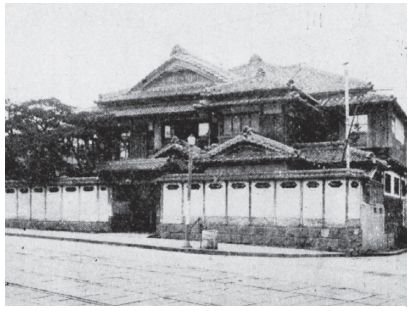
翁は酒盃を手にしてる時でも氣の利いた人物を見付けると、「どうぜよ。此方(こっち)へ來て一緒にやらんかよ」とやる。對手(あいて)が無名の青年でも手を執らんばかりにして献酬する。いろ〳〵話すうちに對手の才識力量を見分けるし、又教育もする。そしていよいよこれならといふ見据ゑがつけば、直ちに登用して川崎産業陣營の一部將として腕一杯の仕事をやらせた。卽ち川崎翁は酒間に於て英才を發見し、更に之に磨きをかける意味で、献酬談笑の間に眞の秀才教育をやつたのだ。されば こそ翁は一代にあの位手廣く百貨店式の多角經營し乍ら、しかも尚ほ夫れ等に要する人材を遺憾なく翁の手許へ集める事が出來たのだ。

川崎翁も亦他の大事業家の例に漏れず、趣味も道樂も生活の一切を、自己の事業に利用する事を忘れなかつた。一ケ年間に三百餘日を得月に居たと云はれた川崎翁は、酒間に同志と懇談の外、かうした人物の掘り出しをやつてゐたのだ。

得月楼本店



得月楼中店



鏡水楼友の家

四、川崎邸内の秀才教育

川崎翁は更に亦自邸に於て、十數年間に亘つて切實なる秀才教育をやつてゐた。則ち翁は貧家の秀才に學資を給して、其の學業の育成を助けたのだ。

翁の補助を受けて成業した者は、十指を屈するも尚餘る。何れも今日成功して社會の上層部に立つ紳士の面目もあり、又川崎家として舊恩を賣る如き誤解を受けても困るから、茲に詳細の發表は遠慮するが、某氏には明治三十二三年頃中學生當時から高等師範卒業まで學資を支給し、尚ほ且つ同氏が京都府立某中學校へ赴任の際には早速旅費等を送金して居る。此人は内地で中學校長を歴任の上、現在は朝鮮で督學官を務めてゐるさうだ。

川崎翁の秀才教育は當時有名だつたとみえて、横山又吉氏や高原伊三郎氏等から、度々書生を頼まれてをる。翁はこれ等の書生を自邸において衣食を給し、學資や遣錢を與へ、參考書はもとより、年何回かの修學旅行などには、何時も過分の金を渡した。又翁は自邸で面倒を見た書生が仕上げると、必ず就職の世話をしてやる。そして其際餞別として屹度金一封を與へてをる。いくら長者の川崎翁でも、義理一遍でこんな行き屆いた世話の出來るものではない。

五、秀才教育を案出した藤崎市長と川島助役

扨て「土佐中」の創立には、兩名の出資者以外に、澤山の援助者があつた。その一人は　かの一圓正興氏と並んで、名市長と謳はれた藤崎朋之氏だつた。藤崎氏は川崎翁とは莫逆の友で、山林製材業などで、度々共同經營をやつたし、翁が土銀頭取の初期から中期へかけて、同氏は屢ば土銀と三菱との連絡係を務めた關係もあり、川崎翁の眞骨頭を最もよく理解してゐた心友の一人であつた。

藤崎朋之氏

大正八年白洋景氣の正に酣はの頃、藤崎市長は心友川崎翁と宇田氏が一攫數百萬金の富の一部を最も有益に散ずるの一大社會事業を企てゝ、一は以て兩翁の晩年を飾るべく、一は以て永久に縣下の公益に資すべく、所謂一石二鳥の名案がなと深思默考の上、ハタと兩手を拍ち是なる哉〳〵と胸中私かに成案を得た。そして直ちに助役川島正件氏を招いて、其の意中を告げた。要領は此の好景気の絶頂に當つて、翁と宇田氏に相當巨額の寄附をさせたいと云ふのだ。茲に

藤崎市長の成案といふのは、或特殊中學校の設立だった。今日土中の標榜するやうな鮮明な「秀才教育」の意識にまで固まってはゐなかつたにせよ、此の兩人の最初の會談によつて、秀才教育の萠芽は生れ、將来秀才教育に向つて進むべき大體の方向が決定されたのだ。

川島助役は直ちに活動を開始した。川島氏は教育畑で叩き上げた人だけに、類を以て集るの諺通り、當時市視學で、英才教育の一權威たる西山庸平氏並にこれ亦教育に理解ある池本市會議員と三人鼎座で種々案を練つた揚句、寄附の目的は、英才教育の私立中學校とし、寄附金額は六十萬圓乃至百萬圓とした。最初藤崎市長と川島助役に依つて作られたる骨格だけの原案は茲に初めて充分の肉付けが出来て確定案近き本當の成案を得た次第だ。三人會議の結果は、川島助役に依つて藤崎市長に報ぜられ、藤崎市長の承認を經て、茲にいよ〳〵確定案が出來たのだ。

川島助役は市長の内意を含んで、まづ宇田氏に會って、その意中を打診したところ、さういふ寄附なら文句なしで出さうといふ。次ぎは先輩格の川崎翁だが、此の慈善翁には、相談など持ち出す

川島正件氏

西山庸平氏

池本浩靜氏

は却つて失禮に當る位だ。義をみては爲さざる所なき本縣實業界隨一の仁者が、何條尻込みする道理があらう。之は事後承諾位のつもりで、寧ろ黙つて事を運ぶのが、眞の意味で川崎翁に敬意を表する所以なる事が分つたので、翁の方はもう大船に乘つたつもりで、いよ〳〵此の運動の表面化に着手する事となつた。

かくして秀才教育土佐中學校の計畫が、茲に黑幕を切つて落して、いよ〳〵華やかな脚光を浴びる事となつたのだ。

六、交渉委員に北川信從氏を頼む

扨て愈よ黑幕が落ちて、表立つて交渉に當る立役者はと云ふと、何さま百萬圓近い大事業だから、中央の然るべき人物に頼まねばならぬ。誰か彼かと人選の結果、白羽の矢は新潟縣知事を辭して當時閑地に居た北川信從氏に立つた。

北川氏は安藝郡北川村の出身で、豪放磊落の令兄忠惇氏に對し、誠實剛直を以て、はやくより官場に雄飛せし海南の一偉材である。令兄忠惇氏は川崎陣營の一部將として、前きには田野、奈半利方面に製材會社を起し、また後には川崎翁の發起せる大東漁業の社長にもなり、翁とは前から懇意だつたし、令弟信從氏とも勿論面識の仲であつた。

北川信從氏

川島氏等が三顧の禮を以て依頼したので、アマノジヤコで通つた北川氏の重い御神輿（おみこし）もヤツト上つて、終に正式交渉

委員として歸縣する事となつた、土佐へ歸った北川氏は川崎翁と宇田氏とへ前後して、豫算額の最少限度たる六十萬圓の寄附を持ち出した。それも決して鹿爪らしい談判でなく「オンシが、オラが」の打ち解けた戯談話の中に萬事すら〳〵運んで兩氏は快く三十萬圓づつの寄附を承諾した。此決定に付某氏への宇田氏の直話に、川崎へは宇田も賛成だから三十萬圓出せと云ふと、ソーカ、ヨシと一言のもとに決定し、其足で宇田氏を訪ね川崎も決つたぞ、ウンシも出せと之も立所に決定した。北川にはヤラレタカノーシと寄附金決定の裏面にはかうした消息があつた。

茲に於て「川崎宇田財團法人寄附行爲」の決定となり、成規の手續を經て出願の上、いよ〳〵大正九年九月二十四日に許可された。

尚ほ右財團法人成立の經路に關し、參考のため「土佐中」の沿革概要から抜萃すると「故川崎幾三郎及び宇田友四郎の兩氏は夙に縣下のため、私財を投じて公共事業を經營せんとするの意あり、大正七八年の交、豫て昵近なる北川信從氏に、其の事業の撰擇を委任せり。爾來北川氏は審思熟慮、永久に且つ普遍的に兩氏の意志を貫徹するは、教育事業に如くはなしと斷じて、之を兩氏に通ぜしが、兩氏亦大に之を賛し、其の資本六十萬圓を提供し、十萬圓を設備費とし、五十萬圓を基本金とする財團法人として之を管理し、豫科を附設する中學校を設立することを協定せり」。

七、奇才天才の育成が目的

宇田氏は三十萬圓が確定した時、昵近の一人に云つたさうだ。「最初十萬圓の積りが、北川の話で三倍になつた」と。

此の話の眞僞は兎に角、土佐中の誕生には、北川氏は確かに生みの親の一人であつた。

此の北川氏は初代校長の三根圓次郎氏に向つて、土佐中創立の主旨として左の如く語つたさうだ。「土佐は不思議にも、古來天才奇才を出す事が少くないと思ふ。それで教育のしやうによつては、先人に劣らぬ偉人を輩出せしめることが出來ると思ふから、シッカリやつて貰ひたい」と。

右は誠に含蓄のある言葉だ。此の一語によつて土佐中創立の趣意は、遺憾なく道破されてをる。實際北川氏の云ふやうに、土佐は古來天才の國である。中には人格上缺點はありながら、――其の爲め末路の慘憺たるものもあつたが、――一方面に傑出せる人物を輩出することは事實である。人格の完成を忽せにせざるは勿論だが、一面右の天才的素質を長養し助成して、薩長土と呼ばれて、奇才天才の簇り生れたるかの維新の盛時を再現せんとするが、北川氏の意圖であり、從つて土佐中の目的であらねばならぬ。卽ち土佐中の目指す所は、則ち天才助長主義である。

三根圓次郎氏

此の天才尊重といふことは、川崎翁としても、その終生の持論であつたから、土佐中の秀才教育には心底から共鳴してゐたに違ひないのだ。川崎翁は前に屢々述べた通り、苟くも一技一能ある者は、努めて其の陣營に吸收した。そして

之等を殆ど除外例なしに、各方面の部將に任命してをる。川崎陣營の要求するは必ずしも無キズの人格者ではない。川崎陣營各方面の必要を充たす才能であり、創意であり、力量であつた。ツマリ川崎翁の切實に求めたのは、天才的人物だつたのだ。

更に川崎翁その人をみるに、人格上些の缺陷なき世にも稀れなる一大天才であつた。翁が如何に不思議の頭腦の持主だつたかは、翁が家居の際、日誌をつけながら。對談流るゝが如きをみても思ひ半ばに過ぎるが、翁は更に手紙を書き對談をし、暗算をもして、一時三事三藝をやつて、しかも夫れが三つ共、完全に出來たと云ふから、之はたしかに聖德太子そのまゝだ。トテモ人間業とは思へない。かくの如く川崎翁は天下稀にみる大天才でありながら、翁には天才に附きものゝ性格上の缺點が毫末もなく、あの通り圓滿至極の人格者だつたことは、秀才教育——天才教育と結局は同意義——の創始者として實に無上の適任者と云ふべきでないか。

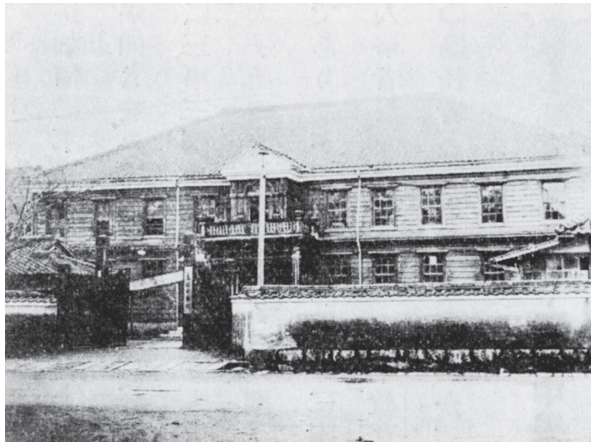
八、土佐中學校の出發（スタート）は川崎家の控家

今、川崎翁の日誌によると、大正八年七月二十四日、北川信從、川島正件兩氏の世話により、中學程度の秀才教育學校設立のことを計畫し、翁と宇田友四郎氏は各自金三十萬圓づつ出資する事を本日發表すとある。恐らく當日土佐中の

創立を新聞に發表したであらう。越へて八月十日には川島正件氏の來訪があつた。寄附額三十萬円中一千圓を同氏に手渡しておる。

翌大正九年一月十四日、新潟中學校長三根圓次郎氏は、土佐中校長として就任し、同年二月八日着任、開校準備に努め、同月二十四日附を以て、私立土佐中學校及び川崎宇田財團法人設立認可となり、同年四月十六日本科入學式を擧行して、生徒二十八名に入學を許可し、市内帶屋町川崎翁の控家（元縣立第一高等女學校舊屋）で、その授業を開始した。

大正九年五月六日、川崎翁並に宇田氏連席の下に、豫科入學式を擧行し、第一學年十名第二學年十五名に入學を許可して豫科の授業を開始した。かくして秀才教育は其の第一歩を踏み出した譯である。



土佐中學校仮校舎

九、六拾萬圓の寄附金に七朱の利子

扨ていよ〳〵土佐中の諸機關が完備して、其の活動を開始すると共に、川崎翁は宇田氏と相談して寄附金六十万圓の

處置を講ずる事となつた。當時翁は土佐銀行の頭取を辭して、表面は一切の銀行と無關係になつてゐたが、何しろ明治三十二三年頃から、二十有余年間、本縣の銀行王――事業王でもあつたが――として縣下全金融界に君臨してゐた翁の事だから、土佐銀行引退後も尚ほ且つ隠然として本縣銀行界の最長老だつたが、殊に宇田氏を頭取とする高陽銀行では、川崎翁は大御所として隠然たる勢力を有してゐた。そこで翁は宇田氏と熟議の上、土佐中への寄附金六十万圓は全部高陽の預金とし、出來るだけ高率の利子を附けて學校の便宜を計る事とした。土佐中に對する此の特別の優遇こそ、實に兩翁の溫い親心とみるべきであらう。

大正九年五月二十四日、卽ち土佐中の入學式の直後、翁及び宇田氏は先づ高陽銀行に於て、各々三十萬圓づつ合計六十万圓の預金を土佐中名儀に振替へた。そして其中五十万圓を定期預金として、一ヶ年七朱に預る事とした。残余(のこり)十万圓中、兼て翁等の土佐中への貸與金六千圓を差引き残金九万四千圓を小口當座として五月二十四日より五月末まで七朱の利子、六月一日より日歩二錢として、是等全部を土佐中へ寄附の手續を完了した。そしてこれ等定期と當座と二通合計六十万圓也の預金証書は、兩翁から改めて川島正件氏に手交した。何と行き屈いた溫い思ひ遣りのある扱ひではないか。仁心溢るゝが如く、しかも縣下第一人の定評のあった大理財家川崎翁にして初めて此の事が出來たのだ。

一〇、校舎の新築と川崎翁の銅像

土佐中の授業は川崎翁の控家でやつてゐたが、いよ〳〵校舎の新築に着手する事とし、まづ校舎の敷地を探した結果、第一の候補地を市外江ノ口としたが、之は或る故障のため取り止めとなり、大正九年七月に至り、遽かに潮江村に變更再度調査を開始し、仝年十月十日仝地に確定し、十二月二十七日敷地五千二百七十七坪五合の購入を了した。

翌十年二月十五日埋立工事を開始のため地鎮祭を行ひ、十六日から起工した。

仝年四月入學式を擧行、本科第一學年十四名、豫科第二年六名、仝一年十三名の入學を許可した。そして仝年八月に至り、いよ〳〵新築工事に着手した。

翁の日誌には工事着手後二ヶ月の十月二十四日、建築費中へ、棟梁長瀬から翁に三万圓の請求があり、中八千圓を學校卽ち財團法人が出し、殘り二万二千圓を川崎翁と宇田氏二つ割にして一万一千圓づつ出してをる。之は建築費不足の

建設当時の土佐中學校

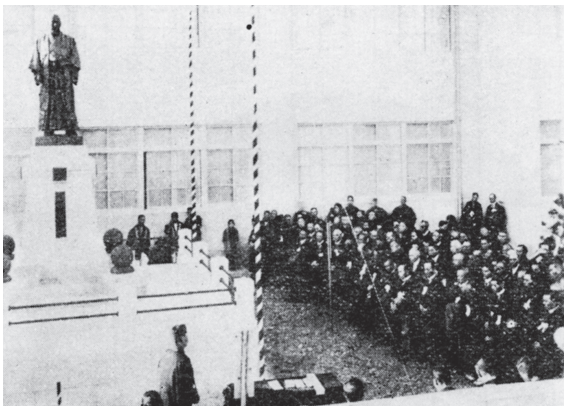
ための追加寄附である。

川崎翁としては之が土佐中との最後の交渉であつた。何となれば翁は此の一万一千圓の追加寄附をして二週間後の十一月八日に發病し、中一日おいて十日に逝去してゐるからだ。

川崎翁の歿後北川信從氏は、宇田氏と計つて、豫(かね)て土佐銀行關係者に依つて醵金し、建設準備中の翁の銅像を土佐中校庭内に建設する事とし、關係者と協議の上決定した。

尚ほ寄附金については、翁の歿後、正確に云ふと大正十一年三月六日、松子未亡人の手から、亡夫の遺志を繼ぐ意味で、十五万圓の追加寄附をしたので、前記の三十五万圓と合せて川崎家の寄附總額は茲に五十万圓に達した。

然るに此の歿後十五万圓の寄附の動機をいふと、或日のこと宇田友四郎氏が川崎邸を訪れて云ふには、どうも寄附金が不足するらしい。それで私の考ではお互に更に十五万圓づつ三十万圓の追加寄附をしたらどうか。私も十五万圓出すから、川崎家でも仝額の追加を願ひたいと云つたが、之は誠に筋の通つた話で、川崎翁が生きて居たなら一議に及ばず賛成するに定(きま)つてる事なので、未亡人は直ちに賛同して寄附の決心したので、ツマリ宇田氏の話が原因となつて居るのだ。


川崎翁銅像除幕式

大正十一年三月末日、校舎新築第一期工事は落成し、帶屋町から新校舎へ移轉した。

仝年十一月十九日、川崎翁銅像除幕式擧行。

翌十二年開校紀念碑を建設、越えて大正十三年四月二十七日理事長北川信從氏逝去、仝三十日全校靈柩を送つた。これより十餘年を經て校長三根圓次郎氏逝去し、後任として愛知縣立第一中學校長青木勘氏本校々長として就任し、現在に及んでをる。

一一、土佐中の設立趣旨と三根校長

初代校長三根圓次郎氏は、流石に北川信従氏の推薦したゞけあつて、當時の中學校長中、一頭地をぬいた人物だった。人格學識兼ね具(そなは)り、縣下の校長會議では何時(いつ)も三根校長が座長格で歴代の知事が却って頭を抑へられてゐたと云はれる位だ。生徒に對しても寛嚴よろしきを得たので全校の生徒からは慈父の如く慕(した)はれてゐた。土佐中の今日あるは、主として此の名校長の施設訓育當を得たお蔭と云つてよからう。此の頃三根校長の胸像建設の議あるも所以(ゆゑ)ある哉だ。

此の名校長に依つて作られた土佐中設立趣意書は、簡にして要を得てをる。趣意書に曰く「本校は大戦後、國運の進展に伴ふ中等學校内容充實の趣旨により設立せられたるものにして、中學校令の示す所により、中堅國民の養成を目的とするは論を俟たざれども、一面また高等教育を受くるに十分なる基礎教育に力をいたし、修業後は進んで上級學校に向ひ、他日國民の翹望する人士の輩出を期するものなり」と。

右の趣意書を更に一言に要約すれば、土佐中は大學の理想的豫備門といふのだ。即ち日本國民中優秀なる指導階級を作るのが目的である。千羊の皮よりは、一狐裘(こきう)を作るのが、蓋し本校の使命である。

一二、土佐中の五大特色

本校が秀才教育を標榜する特殊學校であるだけに、土佐中は普通中學校に比して、何所か際立つた特色がなくてはならぬ。

此の點に關して土佐中では、本校の特に留意せる點として左記の五項目を擧げてをる。

一、個人指導に重きをおき、教授能率の增進を計る事

二、天賦の能力を發揮し、自發的修養に努めしむる事

三、堅忍剛毅の性格、健實なる思想を養成する事

四、責任を重んじ好んで勞に就く習慣を養ふ事

五、運動を重んじ、養護上の注意を忘れず、以て體位の向上を計る事

一と二とは天才教育の方針を示したものだが、三以下は普通中學校の訓育方針と大差なく、質實剛健の氣象を養成し、體位の向上を奬勵したもので、之によって天才教育の弊を防がんと試みた事がよく分る。

一三、天賦能力の發揮と自發的修養

前記の如く本校は、個人指導に力點をおく結果、學年編成の如きも、普通中學校と異る特色を有し、一學級の定員が普通よりズツト少くなつてゐる。則ち本校の學年編成は、本科第一學年に入學せしむるものゝ外、小學校五學年修了者の中から選拔せるものより成る修了年限一ケ年の豫科を置き、定員は豫科は十五名、本科は第五學年を除く外、約三十名の規定である。

本校は上記の如く天賦の能力を發揮し、自發的修養に努むる爲め、個人指導に重きを置く結果、その教授にも手心を加へて、夫れ相應の工夫を要するは勿論である。

則ち本校の教授に當つては、第一生徒各自の能力と學力に應じ、教科書以外に材料を工夫し、個人的指導に努むる事、第二には各教室に辭書を豊富に備へ、自學自習の習慣を養成する事、第三には、第四學年の第三學期に於ては、英、國、漢、數の受驗科目は略ぼ普通中學校卒業程度の學力を有せしむる事等、要するに各自能力に應じて、自學自習、自ら刻苦精勵して、最短期に、最多量の受驗能力を充實せしむることを理想としてをる。

一四、文武兼備の理想

本校に於ては、斯の如く其の設備に、その訓育に、その教授に、あらゆる方面より、上級學校に最優秀の成績を以て進出すべく、一切の努力を此の一點に集中してをるが、然し此の傾向は往々にして智育偏重の弊を生み、片々たる輕薄才子を生ずる事あるに鑑み、本校に於ては、體育と訓練に重きを置き、智徳兼備の健全なる國民の養成を理想としてゐる。

故に體育に於ては、第一各種の體育施設を完備し、夫れ〳〵の體質に應じて、全生徒をして適當の運動をなさしむる事、第二、體操の教授時間を普通の中學規程より、一時間多く課する事、第三、毎月末に於て身體の状況及體力を檢査し、養護上遺憾なからしむる事、第四、毎週各學年一回一時間の課外運動を行ふ事、第五、第三學期に於て第三學年以下全部に武術寒稽古を課する事、第六、運動の際は裸體を奬勵し、暑中休暇が終つて開校の時黒ん坊會にて、その等級を表彰する事、第七、毎日放課後任意に運動競技を奬勵する事。

體育に關する規定としては、眞に微に入り、細を穿ち、恐らく縣下の普通中學校に比してまさるとも、決して劣らざる體育の奬勵ぶりだ。

しかも本校體育の特徴は、學科の個人指導と同じく、生徒各個人の體質に應じて、夫々適切なる運動を行はしむる點にある。殊に普通中學校の各學期の體格検査に對し、本校では毎月末に身體並に體力の檢査をする。更に又裸體の奬勵と黒ん坊の表彰の如き、理想的健康法たる自然生活の推奬をするなど、恐らく縣下その比を見ざる一大特色と云ふべきだ。

かくの如く本校が體育に鋭意するに係らず、或一部の評者からは、土佐中は主智教育の結果、生徒の缺點は、大體文弱で、その性格は個人的、孤立的であり、體質も薄弱だといふ非難である。之は要するに單に秀才教育といふ名だけ聞いて實際を知らざる者の云ふ所だ。万一本校生徒にかゝる缺陥ありとすれば、體格と勇気を喧(やか)ましく云ふ陸士や海兵や幼年學校の試驗に、今日迄連續的に且つ最優秀の成績を以て合格の出来る筈はないのだ。

論より證據、左に掲ぐる「中等學校身體檢査比較表」に於て、本校生徒が縣下及び全國中學校生徒に比して、身長、體重、胸圍の三拍子揃つて、如何にすぐれてゐるかを見れば、本校生徒を文弱などとは義理にも云はれまい。

年齡	學校別	身長	體重	胸圍
十二年	土佐中學校	一三七、一	三一、六	六八、五
	縣中學校	一三七、五	三一、九	六七、七
	全國中學校	一三六、一	三〇、八	六五、五
十三年	土佐中學校	一四五、四	三六、一	七二、八
	縣中學校	一四〇、七	三四、七	六八、三
	全國中學校	一三九、四	三三、一	六六、五
十四年	土佐中學校	一五一、五	四三、〇	七七、五
	縣中學校	一四八、〇	四〇、二	七二、一
	全國中學校	一四五、三	三七、五	六九、九
十五年	土佐中學校	一五六、九	三七、二	七九、九
	縣中學校	一五三、七	四五、八	七六、五
	全國中學校	一五一、九	四二、九	七三、九
十六年	土佐中學校	一六一、八	五二、五	八四、五
	縣中學校	一五九、〇	五一、一	八〇、三
	全國中學校	一五七、一	四八、八	七七、三
十七年	土佐中學校	一六三、三	五四、四	八六、五
	縣中學校	一六一、四	五三、五	八二、三
	全國中學校	一六〇、三	五一、二	七九、九

右比較表で一目瞭然たる通り、身長、體重、胸圍共に、土佐中は、各學年を通じて最優秀だ。縣下中學校の成績は全國の平均より愈(まさ)つてゐるが、本校に比べては全く顔色なしである。身長、體重共にさうだが、胸圍に至つては全然段違だ。殊(こと)に十二歳より年を重ねるに從つて、その開きが大きくなり、十七歳に至つては、全國中學校の平均よりまさる事約七糎の差となつて現はれてゐる。是れ要するに本校の特色ある體育の効果が、年を重ぬると共に、愈(いよい)よ如實に顯はれ來つた證據である。此の一事を以てするも土佐中に健兒なしといふ事の暴論なるはもとより、凡そ夫れとは正反對に、秀才教育の土佐中は、天下に冠たる健兒の集團たることが確實なる統計に依つて明示されてゐるではないか。殊に本校生徒が他校に比して胸圍の發育著しき事は、理想的強健體として誇るに足るべく、要するに土佐中は、獨り秀才教育に於て天下有數の特別校たるのみならず、體育に於ても全國屈指の中學である。實に文武兩道の理想的道場とは蓋し本校であらう。

一五、本校の德育 ― 級會長と週番の制度

本校は智育は固より體育に於ても上陳の通り、全國に覇を稱するの好成績を擧げてゐるが、更に德育に於ても、種々新機軸を出すに鋭意してをる。則ち本校の訓練は智育、體育の場合と同じく、主として自治的であつて、學校が干渉し

て、生徒が澁々從ふのではなく、生徒の内部より、自發的に修養練磨するのだ。此の點諸他の中學校の訓育と余程その趣きを異にしてゐる。流石は三根校長の苦心發案したゞけあつて、理智發達せる秀才にふさはしい遣り方である。

本校は毎月一回、第四學年主體の「向陽會」と稱する自治修養會を開催し、此の向陽會が中心となつて、全校生徒は風紀その他に關する希望を發表討論し、生徒各自に警(いまし)め、以て校規の振作向上を計つてをる。此の向陽會は吉田校長時代の海南學校にあつた四五年中心の談決會と略ぼ其軌を一にするもので、自治團體として最も微妙且つ靈活なる機能を具へてゐる。

本校は清潔、整頓の習慣をつける事に鋭意してゐる。則ち運動器具の整理監督一切の作業は總て生徒の各係により、自治的にやらせる。第三に本校は報恩の念を堅めしむる一端として、毎年一回全生徒は、本校創立の偉人たる川崎幾三郎翁の墓參をする。第四に無監視販賣を實施して公德心の涵養に資する。第五に向上心を喚起せしむる爲め、閲覧室に縣先輩の傳記、内外英雄の史傳、その他の修養書を具へ、生徒に隨時閲覧せしむる等、あらゆる方面より自治的訓練を施してをる。

本校は又生徒の自治制度を徹底せしむるため、普通中學校の級長の代りに、級會長及び週番の制度を設けてをる。週番は軍隊の夫れの如く、上級の生徒ではなく、互選による級會長が各學級に割り出したもので、週番には正副二名があり、その役目は主として、當該學級生徒の風紀振作に努める。日常の勤務としては、毎日生徒の出缺を調査して出席簿

に記入し、教室の備品を整頓し、掃除當番を割り當て、教師と生徒間の傳達に當り、毎朝登校すると、教室廊下の硝子戸を開き、且つ教壇机上の塵芥を拂ひ、そして教師が教室に出入り毎に、「起立、禮」の號令をする。

之をみても本校の週番の任務は、普通中學校の級長に等しく、その上位にある級會長なるものは、一見虚器を擁する如きも、之は一級の徳望家、最優秀生として、週番の最高顧問なる事は、丁度市町村に助役、書記の上に、市町村長があると等しく、本校の眞意は、生徒の在學中より自治に慣れしめ、卒業後、社會自治體の一員として、完全に其の任務を盡さしめんための準備として、かゝる徹底的自治制度を設けたものに相違あるまい。

一六、自治制の中心「向陽會」

次ぎに自治制度の中心機關たる「向陽會」に就いて一言すると、そも〳〵向陽會なるものは本校生徒が學力の進歩と共に、品性陶冶の闕くべからざるを痛感し、本校の傳統的自治精神に基づきて善良なる校風を樹立振作せむとするものである。乃ち本校生徒全部を以て會員となす。第四學年が其の幹部となり、毎月一回會合し、幹部會に於て、豫め主要事項を協議、實行要目の設定を經、開會前、之を公表し、一般の希望をも參酌したる上、茲に最後の決定をするのだ。

更に進んで本會の徳目を擧げると、第一本會員は、至誠を旨とし、勤儉力行の風を養ひ、正義を尚び、職分を全うし、

和衷協同、遜讓の半面、獨立進取の氣象を養ひ、以て品性の向上を期し、專ら決議事項の實踐躬行に是れ努むる事。

そして「向陽會」趣意書の末尾に曰く「斯の如くんば本會の面目益す揚がり、校風の發展せんこと期して俟つべきなり。冀くは諸君之を彊(つと)めむことを」と。

一七、講堂の寫眞と扁額

本校は創立より數ふれば、既に二十年を經過し、建築落成の大正十一年十一月より數ふるも十有八星霜を經て、その設備も頗る充實したが、報恩を以て主徳目とする本校は、その講堂に、本校の恩人として崇敬すべき故人の寫眞を掲げてある。則ち川崎翁を筆頭に、元理事長の北川信從氏、元監事池本浩靜氏、三根校長、宇田友四郎氏、元理事の安藝喜代香、中谷速水兩氏、元監事曾和貞雄氏の寫眞を講堂の左右に掲揚してある。又講堂の正面には、本校創立の恩人北川氏の「養之如春」の扁額と並んで、郷土の大先輩濱口雄幸氏の「實踐躬行」の扁額が掲げてある。

卒業記念樹以外、校庭に異彩を放つは、三根校長の在職中運動場の周圍に植ゑた樟樹で、當時僅かに一、二尺だつたが、今では二丈に垂んとする大樹となつて、鬱蒼として繁茂してゐる。

現在の劍道場、則ち元の柔道場の南側に、プールを設けたのは、校舍新築の大正十一年九月中の事で、工費八千圓を

投じて竣工したる縣下その比を見ざる設備である。他校が卒業生の寄附をうけて漸く設置せるものとは異り、流石は財源の豊富な本校だけに、一文半銭の寄附も仰がずに見事竣工してをる。

中谷速水氏

曾和貞雄氏

一八、開校記念碑と校歌

大正十一年本校新築と共に、建設されたる記念碑は、大町桂月氏の撰にかゝり、僅々三百字中に土佐中創立の意義が遺憾なく顯はれてをる。

開校記念碑文

筆山ノ麓鏡川ノ畔、校舍巍々トシテ咿唔ノ聲、雲ニ響ク是レ土佐中學校ニ非ズヤ、教育振ヘバ國家榮エ、教育振ハザレバ國家衰フ、維新の際薩長土と並稱セラレテ土佐ヨリ人材多ク輩出シタリシハ文ニ武ニ父兄ノ教育氣分盛ンニシテ子弟ノ向學心盛ナリシニ因ラズンバアラズ、爾來教育振ハズ人材漸ク凋落セントス、川崎幾三郎宇田友四郎二氏大ニ慨スル所アリ、巨財ヲ投ジテ土佐中學校ヲ創立大正九年四月ヨリ假校舍ニテ授業ヲ始メ大正十一年十一月十八日本校舍ノ落成式ヲ擧ゲ茲ニ在校ノ父兄相圖リ碑ヲ建テ、二氏ノ功ヲ傳ヘムトス善イ哉擧ヤ父兄既ニ恩ヲ知ル子弟亦恩ヲ知ラザラムヤ、體ヲ鍛ヘ心ヲ練リ德器ヲ高クシ知能ヲ大ニシ國家ニ盡スハ二氏ノ恩ニ報ズル也二氏ノ恩ニ報ズルハ君國ノ恩ニ報ズル也

大町桂月撰

松村翠濤書

開校記念碑

此の碑文の精神は、職員も生徒も出身者も、夢寐忘るゝ能はざる信條たることは云ふまでもない。尚ほ本校の校歌は大正十一年五月、教諭越田三郎氏の作で、土佐中魂が殘る所なく吐露されてをる。

校　　歌

一、

向陽の空淺緑　　廣きぞ己が心なる
大洋の岸物榮ゆ　　伸ぶるは我の力なり
嗚呼幸多き天と地　　自然の啓示かしこしや

二、

誠忠剛武並びなく　靈夢に入るか護國の士
達識叡智類ひなく　自由を唱ふ不死の人
嗚呼先賢に績あり　三才秀で尊しや

三、

孕灣頭軒高く　兼山碑下に庭清し
協力一致誓ひして　集ふ同袍意氣强し
嗚呼勉めよや竭せよや　冠する土佐の名に叶へ

四、

それ右文と尚武こそ　強者の競ふ榮冠ぞ
人道正義の理想こそ　王者の擔ふ使命なれ
嗚呼吾れ享けん不朽の名　奮へや土州健男兒

一九、國家に盡すが何よりの報恩

上陳の記事に依つて明かな如く、本校の秀才教育は、究局する所、日本國民の中堅層を指導し支配する優良且つ強力なる上層國民の育成を目的とせるもので、個人指導を主とせる合理的且つ自然的の教授、訓練に依つて學識、才能、品性、體格等あらゆる點に於て、普通中學校の水準より一頭地をぬきんづる所の所謂棟梁の材を造るを以て、その理想としてをる。而してこの目的達成のためには、何は扨ておき、第一の關心は、本校よりする上級學校への入學率だが、此の點に關して、未だ精確なる他校との比較表はないが、本校の入學率の素晴らしく、且つ入學試驗に優秀の成績を擧ぐることは、今日已に定評がある。現に昭和十四年度高知高等學校へは本校よりの受驗生十二名中十名まで合格してゐる。しかも中八名は四年生だ。殊に最も困難視さるる海兵ですら、毎年六七割の合格率だ。しかも其の合格順位の如き、他校に比して著しく上位だ。流石は秀才教育を標榜せるだけあつて、縣下で入試のトツプを切つて進出するのは、何時も土佐中に定(さま)つてゐる。

今、本校の卒業生をみるに、十中七八は最高の學府を出てをる。試みに第一回の卒業生について、在校中の死亡退學を除く十七名中、帝大出は實に十五名に達し、二名は外語と高商である。更に前きの帝大出身の十五名中、最も多きは法學士の五名、次いで文學士の四名、醫學士の三名で、法學士には鐵道省の副參事や、判檢事や、關東州警部などがあ

るし、文學士には高等學校教授や中等學校教諭などがあり、理學士には高校教授や鑛山技師があり、醫學士には病院長や軍醫がある。第一回は大正十三年で、卒業後十五六年、年齢にしても三十二三歳で、正味十七名の卒業生中、高校教授二名、病院長一名、鐵道副參事一名を出してをる。その榮進振りの鮮やかなること、流石に秀才の名に恥ぢざるものがある。

今、本校の盛運を見るにつけても、川崎翁の逝去が返す〴〵も残念だ。翁の六十七歳の壽命は勿論短命ではないが、翁より五歳年下の宇田氏が昭和十年まで永らへて、本校の卒業式に何回となく臨場した事から考へても、川崎翁にして假りに丸三ケ年だけでも長生きしたなら、大正十三年三月の第一回の卒業をみて、安んじて瞑目の出来た事と思ふ。翁の病中最後の一言が「セメテ第一回の卒業生の進出が見たい」であつた事から考へても、一生幸運に惠まれ通しの川崎翁にも、此一點に遺憾があつた譯だ。川崎翁が幸運な人だけに却つて此の一事が、限りなく悼(いたま)しい。

然し死生は天の命、今更人力の如何ともすべからざる所だ。故に本校生徒並に出身者にして、眞に川崎翁の恩義に感ずる者は、常に翁の墓前に額(ぬか)づくのみならず、かの開校記念碑の撰文の如く、體を鍛へ、心を錬り、徳器を高くし、知能を大にし、國家有用の材となるべきである。是れ乃ち川崎翁の高恩に酬ゆる唯一の途である。げにや泉下の翁にして、土佐中今日の隆運と卒業生諸氏の榮達を知るあらば、翁は必ずや手を拍(う)ち、巨眼を輝かして善哉々々を叫ぶであらう。

草枕旅ゆく人も行き觸らばにほひぬくべくも咲ける萩かな

「萬葉集」

昭和十七年十二月五日発行
編纂兼　高知市春野町五十九
発行人　川崎幾三郎翁伝刊行会代表者
川島　正件